# 港北区災害ボランティア連絡会News

事務局　〒222-0032　横浜市港北区大豆戸13-1吉田ビル206 港北区社会福祉協議会
TEL 045-547-2324　FAX 045-531-9561
FB 港北区災害ボランティア連絡会

116号
2023年5月

http://kohoku-saibora.jimdofree.com

＊入会は随時受け付けています。
＊あなたの町の防災度を高めるためにお力を貸してください 。

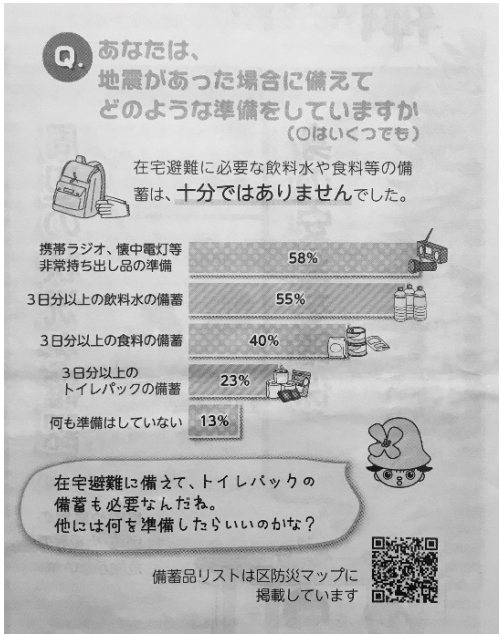

## 防災を自分事にする難しさと大切さ

私たちの会の目的の大きな1つは減災行動を多くの区民にとってもらうための働きかけです。ニュース114号に「家は命の入れ物」と題して記事を書きました。それを読んだ方で市の住宅耐震診断にやっと申し込んだ会員がいました。築70年、昔風の窓が大きな作りが気にいっていると話してくれましたが、残念ながら完全アウトの作りです。以前は「地震が起きたら死んでも仕方ない」とおっしゃっていた方ですが、考えが変わったようでとても嬉しい話です。

4年に1度行われる区民意識調査(2020年度)によると、地震で生き延びるための備えは決して高くないことがわかります。このアンケートでは住宅の耐震化については聞いていませんが、横浜市の「第3期横浜市耐震改修促進計画」によると、個人住宅の耐震化率は現状で88%です。それを2026年度までには92%に上げたいと書かれていますが、課題として「所有者の高齢化による耐震化意欲の減退」が挙げられています。確かに高齢者の一人としてよくわかりますが、データはその年齢層の死亡数が多いことを物語っています。

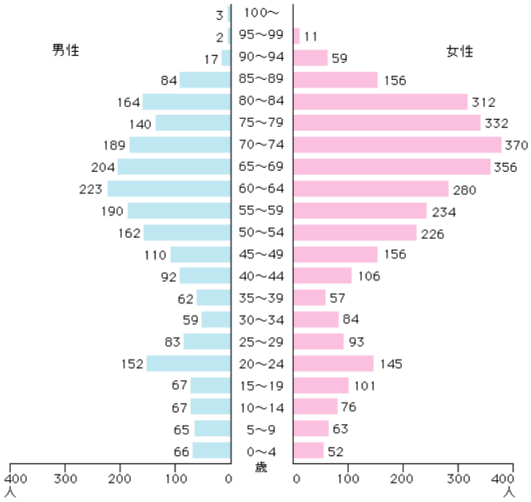
新年度の活動が始まります。2022年度はまだコロナの影響もあり、会員全体の活動状況は活発だったとは言えないものがあります。しかし大切な命と日々の暮らしを守るため減災活動の大切さを全会員で確認し、多くの周りの人に防災を自分事にしてもらう活動を共に進めていきましょう。会員の皆さんの協力がなければ会は前進しないのです。

(宇田川)




港北区報より転載

図1　性、年齢別（5歳階級）別死亡数




阪神淡路大震災　兵庫県医師会資料

# トイレは大切！
# でも、使えますか？

＜撮影者　付岡さん＞

　昨年、「災害時のトイレ対策」についてセミナーを開催しました。その時に最低でもひとり1日5回3日分の簡易トイレを備蓄するようお話をしていただきました。
　私がトイレパックを初めて手にしたのは、拠点訓練で配布されたものでした。帰宅して（トイレを催してはいませんでしたが）早速袋から出し、点検、説明書の通りに自宅のトイレに処理袋をかぶせ、コップ1杯の水を入れ、凝固剤を入れ固まる様子を見ていたのを覚えています。一回分だけなのに、処理袋の大きいことに少し疑問を持ちました。でもトイレにかぶせるには必要な大きさなのです。
　その後色々なイベントで戴いたり、自分でも買い求めましたが、皆同じようではあるが、処理袋のたたみ方が違ったり、材質に違いがあったりで、微妙に肌触りに違いがありました。きっと実際に使用するときには慌てていることもあり、緊張感があるでしょう。又、パックが入っている袋の説明文の文字が小さく読めません（老眼）。必ず一度は説明をきちんと読んで、試してみた方が良いと思いました。
　災害時のトイレ問題はとても大切です。トイレの衛生状態が悪化することで、トイレに行く回数を減らそうと、水や食事を控えて体調を崩したり、感染症の原因になるなど、多くの問題を発生します。備蓄（練習も含め）は必要ですが、もう一つ使用済の処理袋を収納するために蓋つきの保存容器もぜひ準備するのが良いと思います。　　（付岡）

　熊本地震がそうであったように、大きな地震が発生すると水道をはじめ、ライフラインが止まることがあります。また、見た目は変わらなくても、下水管が破裂するなどの異常事態によりトイレが使用できないこともあるようです。その状態でトイレを通常のように使用すると瞬く間に悲惨な状態になることは想像できると思います。トイレが不衛生になると、トイレへ行くことを我慢して、健康に悪影響を与えることもあるようです。仮設トイレが設置されるまで、ある程度の時間を要しますので、その間、簡易トイレを有効に使うことが衛生面を保つためにも必要だと思います。特に発災時に、この意識を共有することと、徹底することが重要なのだと、熊本地震の益城町避難所の運営サポートへ行った際に感じました。ご家庭に簡易トイレを備えておくことと、いざという時に簡易トイレをスムーズに使用するために、どこかで一度使用することをお勧めします。　　（鴨下）

## 便利なもの見つけた

撮影者　宇田川さん

　経産省はトイレットペーパーの備蓄量を一か月分と言っています。使用量は一人一週間で一ロールと計算するようですので、一人４ロール必要になる計算です。家族が多ければ×人数となりますね。すると水の備蓄と同じく場所をふさぐので必要量の確保が難しくなります。普通のロールは50m巻きがほとんどですが、これは250m巻きですから、一巻きで5本分になります。最近あちこちでよく見かける長尺トイレットペーパー、お勧めです。
（宇田川）

港北区災害ボランティア連絡会は、区内で開催されるイベントなどに出店して、過去に国内で地震や台風などの災害に見舞われた地域で活動をしている団体の物品を取り寄せて販売をしています。会員がそれぞれのネットワークを活かして出会った「美味しいモノ」ばかり！（と胸をはって言えます）
災ボラがイベントに出ないと買えないのかしら？という問い合わせをいただきましたが、個人で購入できるところばかりなので、これから、少しずつ紹介をしていきます。ぜひ、食べてみた感想や「これを使ってこんなレシピを作りました～」といった情報もお寄せ下さい。
「被災地の物品を購入」していただくのは大切な復興支援です。それにプラスして「美味しいモノ」を通しての新しいつながりになれば幸いです。（山口）

## 第1回 くじらのしっぽ（宮城県石巻市）の絶品塩蔵ワカメ

「あの味が忘れられない！」「また食べたい」と大評判の塩蔵ワカメを提供しているのは「くじらのしっぽ」で、社会福祉法人石巻祥心会が運営しています。当会の宇田川会長が、東日本大震災後に東北各地でボランティア活動に出向いている際に出会ったのがご縁です。

会員Yのおススメは「ド定番」ですが、やっぱりこのワカメを使ったお味噌汁！！　シンプルなだけに、ワカメの美味しさがしみじみ伝わってきます。

ワカメ以外にも「金華塩」「バジル塩」「かき飴」といった商品があるそうなので「気になる～」という方は、ぜひお知り合いの災ボラ会員にリクエストしてみて下さい。

ネットショップから個人でも購入できますので、以下のURLまたは右の二次元バーコードからご覧になって下さい。
https://kujiranoshippo.wixsite.com/kujira

# 港北区災害ボランティア連絡会25年目

港北区災害ボランティア連絡会は1998年に発足、今年は25年目になります。1995年に起きた阪神淡路大震災では一瞬にして多くの建物や、命を奪われました。その時活躍したのがボランティアでした。しかし残念なことに組織立った活動・望むような活動が行えず、むなしく現地で過ごしたボランティアも多く居ました。そのようなことから「地域の連携を図るために」港北区ではいち早く、区・社協・ボランティア団体が一丸となって、災害ボランティア連絡会を発足させました。

現在は、どこの地域にもある「災害ボランティアネットワーク」ですが、当初は「顔の見えるネットワークづくりに参加してください」が精いっぱいで、どのようにボランティアの方をコーディネートしてよいか悩む日々でした。現在ではメンバーの方も変わり、ボランティアセンター運営方法にも変化（ITを駆使しての運営）。幸いにも港北区では大きな災害が起きていませんので、中々有事の様子がつかみきれていないところがあります。

これからも会員同士の活動を尊重し合い、学び合い研鑽する中で、住民の皆さんの協力もいただいて「災害に強い街づくり」を目指していきたいと思います。（付岡）

# お世話になりました　これからもご活躍を

港北区災害ボランティア連絡会の皆様、私はこの4月をもって、港北区社会福祉協議会から異動することとなりました。

私がこの連絡会を担当させていただいた期間は、皆様と一緒に災害に関する知識を深めたり、災害ボランティアセンターの運営について考え、貴重な経験を得ることができました。バザーで一緒にお店に立ったことも、楽しかったこととして思い出されます。

また、このニュースの過去の連載である「我が家の防災」などを参考にさせていただき、飲料水や食料、簡易トイレを自宅に備え、転倒の恐れがある家具を置かないようにするなど、気をつけて参りました。職員が倒れてしまっては、困難に直面する方たちを支援することはできないと痛感し、少しずつ準備を進めました。

このような港北区での経験は、新任だった私にとって大変意義深いものとなりました。異動先でもこの経験を活かし、つながりを大切にしながら、地域の皆様と福祉の推進に向けて精一杯がんばりたいと思います。今までありがとうございました。

（遠田哲也）

防災コラム　　**「防災ボランティア事始め」**

災害時におけるボランティア活動は100年前の関東大震災のときにも見られました。その後の災害発生時にも学生や青年団、僧侶などが救援活動に参加した記録があります。近年では1990年から始まった雲仙普賢岳噴火や1993年の北海道南西沖地震でも多くの人の関心を引き参加者も増えていきました。

ボランティア元年と呼ばれた阪神淡路大震災で活動した人たちが各地でグループ化をはじめ、日本の防災ボランティア団体が生まれていきました。それを後押しするように1995年に改定された国の防災基本計画には「防災ボランティア活動の環境整備」「ボランティアの受け入れ」の項目が入りました。

神奈川県民活動サポートセンターはそれを受け県が整備したボランティア活動支援施設です。

（宇田川）

【編集後記】

◆最近知った西アフリカの諺です。「祈るときは足を動かせ。When you pray, move your feet.」（室伏）

◆日本各地で地震が多発しています。万一のための備えを怠らないようにしたいですね。（鴨下）

◆トイレットペーパー1ロール250mは気が付きませんでした。私は３年ほど前から1ロール150mを見つけて「やったー」と思つていましたが、それでも買い求める頻度が減りました。（付岡）

◆災害がある場所に「神社」を建てて、神をまつり祈ったそうです。日本の神社の多さが、災害の多さを表しているように思います。（中島）